

## 『エチカ』の論証について—分析・総合ではない方法をめぐって

大阪大学大学院 文学研究科 哲学・哲学史専攻 博士前期課程 1年 樋口 朋子

本発表の目的は、スピノザ『エチカ』での幾何学的秩序について、それを総合の方法とみなす解釈を批判することである。確かに、『エチカ』の論証は少数の定義と公理から始められるため、総合の方法であるとみられるかもしれない。しかし、本発表で指摘される事柄によって幾何学的秩序を総合とする解釈は否定される。その上で、本発表はどのように『エチカ』の幾何学的秩序を考察すべきかという問いについての今後の探求の方針を示す。

分析と総合について、デカルトは『省察』第 2 答弁でこのように述べる。分析は「事物が方法的に、そしていわばア・プリオリに見つけ出されたその真の途を示す」方法であり、読者は証明される事柄を自分で見出したのと同様に知解する。総合は、「正反対の、いわばア・ポステリオリに問われた途によって、…結論されたところの物を論証するものであって、」定義、公理等を用いた長い証明の連鎖を用いる。このため、読者がその証明の何処かを否定しようとしても、それは先行の理由に入っているため、読者を説得することができる。分析で行われるような物の発見される仕方を総合は教えない。

確かに、『デカルトの哲学原理』序文では、マイエルによってデカルトによるような分析と総合の説明がなされており、また『エチカ』は定義と公理からの論証の連鎖から成っている。しかし、上に見たような分析・総合の方法として『エチカ』の幾何学的秩序をみなすことはできない。まず、スピノザ自身は著作において一度も「分析」、「総合」の語を使用していない。次に、総合の方法であれば、定義や公理は分析において真と見出されたものであるけれども、『エチカ』の定義と公理はそのようになっていない。むしろ、『エチカ』の論証においては、新たな事柄が発見されている。

『省察』第 2 答弁には、『省察』での分析で見出された事柄の幾何学的な仕方による論証が付されている。ここで総合の方法で論証される事柄は、分析ですで見出されたことであつた。一方で、スピノザの『エチカ』は、幾何学的秩序による論証、つまり定義や公理からの論証からなっているけれども、その論証において発見がなされている。エウクレイデス『原論』で定義上与えられた三角形などの図形が作図される過程が論証で扱われているのと同様に、『エチカ』では未だ見出されていない事柄が見出されている。例えば、第 1 部定理 11 で神的実体の存在が証明される過程を追うならば、その過程は定義された実体がどのような特質を持つかが徐々に見出されていく過程である。このようなことは上に見たような総合の方法ではなされない。そのため、『エチカ』の方法は分析・総合の観点で説明されない。